

# 大船渡市末崎地区「ハネウエル居場所ハウス」の試み Challenges of Honeywell Ibasho House in Massaki District, Ofunato City, Japan

森 傑<sup>1)</sup>  
Suguru MORI

1)北海道大学大学院工学研究院, 教授, 博士(工学) (suguru-m@eng.hokudai.ac.jp)  
Professor, Faculty of Engineering, Hokkaido University, Ph.D. in Eng.

The Honeywell Ibasho House, a community gathering place in Massaki district, Ofunato City, was opened on June 13, 2013. It was dedicated to enrich the lives of local victims affected by the Great East Japan Earthquake and Tsunami of 2011. The concept for the Ibasho House was developed by Dr. Emi Kiyota, a gerontology specialist in Washington, D.C. based not-for-profit organization. The building, designed by Architecture + Planning Lab., Hokkaido University, uses reclaimed wood framing provided by local residents in Rikuzen-takata. Its architecture reflects traditional Japanese house style with modern technologies designed to withstand earthquakes.

居場所, 環境移行, アフォーダンス, コミュニティ, 地域構造, 気仙大工  
Place, Environmental Transition, Affordance, Community, Regional Structure, Kesen Carpenter

2013年6月13日、大船渡市末崎地区に「ハネウエル居場所ハウス」(以下、居場所ハウス)がオープンした。建設費の約3,200万円は、宇宙航空分野にかかる製造などで世界的に知られる、ハネウエルインターナショナルからの寄付によるものである。世代にかかわらず地域住民が気軽に寄り合える場の提供を目的としている。特に、65歳以上が3割を超えている大船渡市において、高齢者が主役になりながら様々な世代と属性の市民が交流を深め、これからの地域の復興やコミュニティの賦活へ繋がる活動拠点となることを目指している。

居場所ハウスのコンセプトは、米国ワシントンD.C.に拠点を置く非営利組織Ibashoの代表である清田英巳氏により提唱されたものがある。当プロジェクトには、国際的な人道支援組織である米国のOperation USA、大船渡市の社会福祉法人典人会が運営をバックアップし、建築設計は筆者らの北海道大学建築計画学研究室が担当、建設は有限会社伊東組が担当した。

居場所ハウスの建築的な特徴は以下の3つである。

## ①新しい地域構造へと向かう復興活動を結びつけるノード(立地と配置)

居場所ハウスが立地する末崎地区には、仮設住宅が平林仮設団地として70戸、大田仮設団地として134戸、山岸仮設団地として58戸がある。また、復興事業として、居場所ハウスの近隣に市営住宅が16戸、県営住宅が50戸、防災集団移転が25戸と、それに伴う新たな道路が計

画されている。東日本大震災の影響により、末崎地区の地域構造は劇的に変容する。現時点での大規模な仮設団地だけでも、これまでの人々の生活や住民同士の繋がりを大きく変化させている。今後の集団移転や公営住宅の建設では、新しいコミュニティのあり方を模索していかなければならない。居場所ハウスは、そのような将来の生活変化に対し、被災者の負担を軽減しつつ、地域住民が主体的・積極的にその変化に関わろうとすることができるとしての立地と配置を計画した。

## ②気仙大工の技法を活かした建て方とそのプロセス(職人と技術)

地域の誇りの一つとして、気仙大工と呼ばれる文化がある。居場所ハウスでは、気仙大工の文化を持つ地元の職人が存分に腕を發揮できるプロジェクト環境を目指した。縁があり、陸前高田にある古民家を譲り受けることができ、古民家の木造フレームを移築するという建築アプローチを採用した。古民家の柱・梁をいったんばらし、部材を精査、現在の法規にも適合するように再利用・再構成しながら別の場所で組み上げるという芸当は、高度な技術を持つ大工にしかできない。地元の文化に敬意を表し、関係者が自らで再建しているという実感を獲得できるような建設プロセスを試みた。

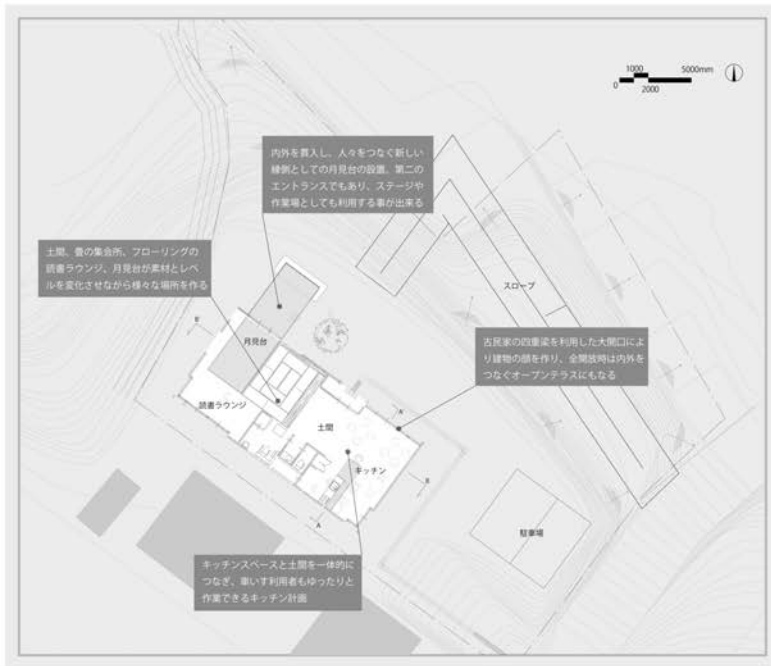
## ③利用者の能動的な使いこなしを引き出すアフォーダンス(空間と設え)

災害後の被災者と地域の回復において最も大きな課題

は、環境移行である。環境移行の過程において大切なのは、いかに被災者自身が新しい環境づくりへ能動的に介入できるのか、介入しようとするのかである。地域の生活や構造が劇的な変容を遂げていく中で、この居場所ハウスが、地域とその住民が安定した自己を獲得していくうえでの一助となることを期待している。環境デザインは、設計者の明確な意図を反映し隅々まで計算し尽くされたものとはしていない。利用者が手を出し難くなる作品的な完成度は意図的に避けた。失ってしまったかつて

の住まいに似た親しみのある環境、自分たちの創意工夫で様々なカスタマイズすることが容易に想像できるような環境の実現を目指した。

居場所ハウスは、少なくともこの先5年間、仮設住宅の解消や災害公営住宅・集団移転などによりコミュニティの再編が課せられる中で、NPO 法人「居場所」創造プロジェクトが中心となり、料理やガーデニング・木工といった住民の知恵と技術を柱とする活動を通して、地域の生活圏の再生と再構築を試みていく。



ハネウエル居場所ハウス (岩手県大船渡市末崎町平林 54-1)